

活動記録



高齢ユニット 公開研究会報告

大学研究拠点における Research Administration

－研究企画・マネジメントのこれからを考える－

近年、日本の大学における研究運営は、国際化、学際化、産官学連携、ガバナンス等がキーワードとなっています。一方、研究者を取り巻く状況は厳しく、若手研究者のキャリア形成の難しさ、教員の研究時間の確保の困難などがあります。今日の大学研究拠点は、これらの研究に困難を伴う諸条件を改善しながら、学術研究や大学の発展を図ることが求められる時代にあります。

今回のイベントは、大学研究拠点における研究運営の今後について、様々な立場から自由に考え、議論する場として企画され、平成 28 年 3 月 24 日に東洋大学白山キャンパスで開催されました。

【登壇者】(肩書：開催当時)

- 報告者： 小椋佑紀 (東洋大学福祉社会開発研究センター 研究支援者)
コメンテーター： 村上壽枝 (東京大学政策ビジョン研究センター 特任専門職員・URA)
根岸哲也 (東洋大学研究推進部研究推進課 課長)
コーディネーター 小林良二 (東洋大学福祉社会研究センター 研究員／運営委員)

【概要】

今回の議論では、大学の研究企画・マネジメントを担う URA (University Research Administrator) をどのように理解するかが鍵となりました。URA は、事務職員、研究者、いずれでもない新しい職種として、国公立大学を中心に、近年配置が進んでいます。

○URA の役割

はじめに、小椋研究支援者は、大型プロジェクトにおける研究とマネジメントの違いについて、前者は点 (研究テーマ) を、後者は面 (プロジェクト内外の俯瞰) をベースとした活動であり、必ずしも同一ではないことを示しました。また、マネジメントスキルの発展に、「学際的／総合的視点」「企画・提案」の程度が関わっていることを指摘しました。次に、トップマネジメントを担う研究者と URA の関係について、例えば、組織が内部を束ねてある方向性を出す際、URA は当該研究者の持っているものを引き出す役割があり、研究者とは違った視点で一緒に取り組む立場にあるのではないかとのことでした。研究補助者 (研究支援者等) と URA の関係では、研究補助者のマネジメントスキルによって、URA との類似性が高まる場合があるけれども、研究キャリアに基づく採用のため、職位と役割に矛盾が生じ、利害関係が複雑になること等を指摘しました。

村上 URA が所属している東京大学政策ビジョン研究センターは、分野横断型の研究を通じ、政策提言を行っている組織です。同氏は、センター長のバックサポート、文部科学省の URA スキル標準の策定事業、内閣府「総合科学技術・イノベーション会議」の有識者メンバーの支援等に携わってこられました。大学本部の URA としてもご活躍です。URA の役割に関して、研究企画やマネジメントに携わる人には、「研究者の活動が、当該組織の文化において、生き生きと生かされるような水先案内の役割」があり、これを大切にしているとのことでした。また、研究グループを組織し、win-win となるようなグループ間のチームワークを考えるだけでなく、大学運営や国の動きにも関連している点で、3 次元的な役割となっているとのことでした。

URA の配置が始まった背景には、研究者の研究以外の業務負担の問題等がありますが、現在は、ガバナンス強化や産官学連携に寄与する研究経営人材としても期待されています。小林研究員は、上述のスキル標準に挙げられている URA の業務が、研究戦略推進支援、プレ (ポスト) アワード、関連専門業務 (広報、イベント開催、産学連携・国際連携支援等) から成ることに着目しました。そして、URA 機能の重要なポイントは、研究を拓げる横の発想、研究戦略推進支援がその他の業務に連動して行くことにある、とまとめました。

○本学における URA 導入の可能性

本学における URA の必要性について、根岸課長は、外部資金申請のサポートや産官学連携の推進に、URA のような人材が必要と感じているとのことでした。そして、URA の導入は、できるところから取り組んでいくことが大切であり、既に理系に関しては、知的財産のマネジメントのポストを、URA のような仕事もできる人を採用する形で見直しを行っているとのことでした。文系については、社会福祉学科のように、科研費の応募・採択が多い領域で、URA 的な人材を間接経費で雇用し、実績をあげていく方法が考えられるとのことでした。



今回の研究会は、企画から当日運営まで、全てのプロセスに若手スタッフが主担当として関わりました。ご登壇くださった村上 URA、根岸課長をはじめ、バックアップを下さったすべての方々に御礼申し上げます。

(作成者：客員研究員 小椋 佑紀)